



染付鍋島藩窯絵図大皿 径53cm高10cm、江戸末期

写真説明……鍋島藩では、寛永5年（1826）藩窯の制を定め、初めに有田の岩谷川内に窯を焼き、独自の運営を行ない、諸般の策を講じて有田焼の発展を促した。

本写真は、中央附近が藩吏の詰所、右手一帯が細工場で、左中央に登り窯が見える。

封建時代、他藩にも御道具山があったが、鍋島藩では、他藩に類を見ない組織の中で、二百数十年の間、

有田の師表的存在として當まれてきた。

初期の頃は、御道具山自体で赤絵を焼いていたが、中期以後になると赤絵は有田町の赤絵師に依託してつくられたので、ここから色鍋島の精巧な製品が生れるようになった。

藩窯の製品は「鍋島」といわれ、染付、青磁、色鍋島に分けられるが、どの製品も少しのごまかしもなく端正な格調にみなぎり、洗練された意匠と配色の美は精巧そのものである。

種類は食器類や花瓶、香炉、硯屏、水指等であるが、大部分が食器で、中でも木蓋形の高台皿は最も藩窯の性格を表わしている。

色は、赤、黄、緑の三色で、まれに黒と紫がある。図柄は、あぢさい、宝づくし、椿つなぎ、花籠、更紗、たんぽば、桃図等多種多様であるが、何れも絵画的要素を巧みに図案風に構成したデザインは、近代的で、形状によくマッチし、色彩の濃淡の調子は全体をよく安定させている。また墨はじきによる染付の美しさは力強く、藩窯の特色がよくうかがわれる。

鍋島藩窯磁器	1
三根霞鄉	2
有明海、玄海漁撈具展	3
土生、久蘇遺跡資料展	4
九博協特別講演会	5
九博協総会より	6
県内博物館紹介、祐徳博物館	7
博物館日誌、行事案内	8

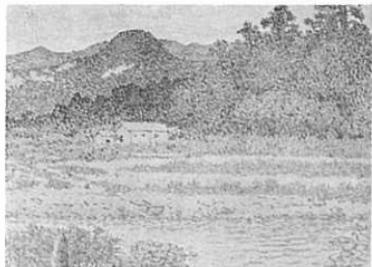
資料紹介

三根霞郷の作品

霞郷は、明治16年1月、現在の武雄市に三根一樹の次男として生まれた。本名を貞一といい、はじめ成村と号し、のちに火郷、さらに霞郷と称した。

明治34年、19歳の時に、洋画家を志して上京し、小山正太郎の不同舎に入門、洋画の基礎技術を学んだ。当時の不同舎には、青木繁、坂本繁二郎、山下繁雄らがあり、満谷国四郎も先輩として指導に当っていた。

明治37年、兄が亡くなると、一家の支えとなるべく帰郷。依頼肖像画等で糊口をしのいでいたが、同41年に、九州を流浪中の青木繁の来訪に刺激され、翌年にはフランス遊学を志してウラジオに渡った。しかし、母の病臥にあい、フランス遊学もかなわぬまま44年に帰国、母の死後は禅寺の門を叩いたりした。



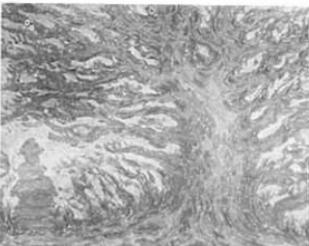
上賀茂風景　油彩　1914年　33×45cm

大正3年に再度決意を新たにして上京の途につき、途中京都に寄ったが、事情が許さなかつたためそのまま京都に在住することになり、昭和21年1月小倉山滝口寺で逝去した。その間、大正13年には門弟と北海道写生旅行に出かけたり、同14年には下鶴に洋画塾を開いたりして、油絵研究に力を注いだが、昭和12年頃からは水墨に自らの表現方法を見出している。

挿絵の「上賀茂風景」は大正3年、「巨樹」は昭和3年、「山陰の漁村」は昭和20年の作品である。これら三点を較べてみると彼の画業の推移がわかる。

「上賀茂風景」は、いわば習作と呼ぶべきもので、彼が洋画家としての源泉を何処に求めていたかという問い合わせを明らかにしてくれる。この後期印象派風の点描の風景は、おそらく明治末年から大正にかけての画家たちに共通の芸術思潮の一端をあわらすものだが、ミレー、ドーミエ、スーラー、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン等を学んだあとが、この頃の彼の作品にはしば

しば見受けられる。



巨樹　油彩　1928年　33×45cm

ついで「巨樹」になると、ここでは、ゴッホ流の筆致を見せながらも、同時に彼の独自性といったものを認めることができる。そのひとつは、粗い木版風のタッチである。さらに強い粘着力でまきこむような構図は、版画家的なタッチとひとつになって、求心力とも呼ぶべきものを感じさせ、それが、その後の彼の作品にしばしば見受けられる、ある精神性を画面に与えて



山陰の漁村　水墨　1945年　75×55cm

いる。

「山陰の漁村」は絶筆と称されるものだが、この水墨画は、ある意味で、彼の画歴を集約しているともいえる。なぜなら、そこには、彼が油絵時代から既に内包していた版画家的な素質や、近代西洋画に学んだ構図、さらには画面に漂う深い精神性といったものが、すべて集約された形で入り込んでいるからである。

ともあれ霞郷は、油彩画から水墨画へと移る過程で、彼独自の画風をつかんだといえるであろう。

(学芸課　三輪 英夫)

展示資料紹介

その1

有明海・玄海漁撈具展



◎7月4日から7月25日まで、本館大展示室にて開催するが、展示資料は本館所蔵のものであって、写真パネルや解説パネルをできるだけ豊富に利用して参観者の理解を深めたい。有明海漁撈具は、重要民俗資料に一括指定されているものであって、学術的に高く評価されている資料である。民俗資料は、生活の必要からうまれた極めて風土色豊かなものであって、わたくしたちの生活の推移を知る上から欠くことのできない価値を有しております、また、個々の物自体には、図り知れない生活のちえと機能の美が秘められている。

◎有明海は水面積が狭い潮に流入河川が多いので栄養塩類に富み、魚貝類の天然飼料が豊富なために、稚魚の成育に適している。局部的に外洋性魚類のサワラ・ヒラ・グチ等が生殖のために回遊くるし、餌を求めて回遊してて長期間滞留するハモ・サヨリ・マボラ・ススキ・クロダイ・ヒラメ等も多く、定住している沿岸性魚類には、ハゼ・アカゲチ・メナド等がいる。

広大な干潟は、泥土および砂土からなっていて、餌料となるプランクトンも多いため貝類の繁殖に適していて、アゲマキ・カキ・アサリ等が棲息している。

干潟に棲息する魚貝類を捕獲する干潟漁業は、手取り漁業とも呼ぶべきもので、極めて特色ある原始的な漁業である。しかし、干拓事業の進捗に加うるに、養殖場の拡張に伴なって、干潟漁業は著しく狭められ、その漁業は生業から脱落して自家消費用の漁撈または一種のレクリエーションの潮干狩への傾向をたどっている。

沖合においては、潮流を利用する定置網や流し網などの小規模な沿岸漁業が営まれているが、漁場が狭い上に漁獲高も減少の一途をたどっているため、長崎・福岡・熊本などの隣接する各県の海域への出漁も早くから行われてきている。また、明治年間の中頃からは

この狭い漁場に見切りをつけて、朝鮮海域への出漁も行なわれていたが、最近では内海漁業の不振を打開するために、各種の貝類やアサクサノリの養殖がさかんになり、有明海漁業の中心となっている。

潮流の干満の差が著しく、干潮時には広大な干潟を現出する有明海のその干潟やえごには、ムツゴロウ・ワラスボ・トビハゼ・シオマネキ・アゲマキ・アサリ・シャミセンガイ・シャッパ・ウミタケ・ウナギ等が棲息している。これらの魚貝類を捕獲するために必要な各種の干潟漁撈具、養殖貝採集用具、網用具とその付属品、つり用具、衣服類、舟と押板、舟上での生活用具等の他、有明産の各種魚貝類標本を展示する。有明海の漁撈具は、地方色に富む特色あるものであるばかりでなく、有明海という特色ある風土に培われてきた民俗の一端をしのぶ好資料といふべきであろう。◎玄海漁撈具については、藩政時代において唐津藩の保護のもとに、呼子と小川島を根拠地として、はなばなしく展開された捕鯨関係の資料を中心に、唐津魚市場から寄贈されている玄海産の魚類標本の一部を公開することになった。藩政時代初期から始まつたと考えられる小川島捕鯨業は、もり突き法から網取り法、そしてノールウェー式捕鯨法へと変遷をとどけたが、今日ついに廃絶してしまった。

小川島捕鯨大意書に、小川島捕鯨業の推移が詳しく記されており、肥前物産図考にもこの捕鯨業について描写されている。また、「小川島鯨鯢合戦」は、中尾氏が從事した捕鯨の模様を、絵と文をもって天保11年(1840)、7代中尾甚六の時代に書かれたものである。中尾家の家歴によると、2代中尾甚六は、漁区を大いに拡張して、宝曆のころ(1751~)は、すでに五島魚の目と有川の両浦に進出している。そして、次第に実力が加わってくると、壱岐や平戸にまで網をひろげている。

いま、呼子港には中尾氏繁栄の跡として、3代中尾甚六が菩提寺として宝曆5年(1755)に建てた石上山竜昌院があり、ここで鯨供養を行なったという。境内には、中尾氏代々の墓塔とともに、鯨鯢供養塔が2基現存している。この寺は、鯨1本の代価をもって建立したものと伝えられ、中尾氏は元禄3年(1690)初代甚六から初まって、明治10年8代甚六まで、凡そ190年間にわたって代々捕鯨に従事したのである。

今日、小川島に鯨見張小屋が僅かに残存し、鯨供養塔が小川島や呼子の竜昌院等に数基存在してのみであり、捕鯨用具の大半は散失してしまって、勇壮で華やかであった小川島捕鯨業をしのぶものとしては、「小川島鯨鯢合戦」や「肥前物産図考」等の絵巻が伝承されているのみである。

(学芸課)

展示資料紹介

その2

土生・久蘇遺跡資料展



1. 期日、8月4日～8月25日

2. 会場、県立博物館大展示室（常設展と併行）

3. 遺跡と調査の概要

佐賀郡久保田町土生と小城郡小城町久蘇の両遺跡は佐賀沖積平野の水田地帯に立地する広範囲にまたがる平地農耕集落遺跡である。この地域の水田地帯に鎌倉復旧工事が施行され、その工事の過程で多久市在住の西村隆司氏によって遺跡の存在が確認されたものであって、昭和46年9月から11月上旬まで長期間にわたり県教育委員会の手によって緊急調査が実施された。

しかし、遺跡の範囲は広大であり、工期との関係もあって、この遺跡の全面調査を実施することは不可能であったばかりでなく、調査に先立ってすでに破壊された部分も相当に存在した。しかし、遺跡の一部は、現状のままに保存されて、本年度にさらに第2次調査が実施される予定であり、この遺跡の究明はこの調査結果に期待される点が大きいといふべきであろう。

4. 遺跡の性格

土生遺跡は、弥生時代中期の単純遺跡であるのに対し、この遺跡の西方に隣接する久蘇遺跡は、弥生時代中期と古墳時代前期の複合遺跡であるが、この久蘇遺跡の西端には鎌倉時代のものと推定される平窓跡も発見されて複雑な遺跡の様相を呈している。

遺跡は、現在の水田耕土の直下から相当な深層まで及んでいるため、耕土直下にあるところは遺構が相当に乱れている部分も存在している。

この遺跡の特色として、低湿地に立地している関係から、一般的な遺跡から出土する石器・土器類の他に、木器類や建築材が相当豊富に出土している点である。土生の弥生遺跡からは、木製鋤等の農耕具が出土して

いるのに対し、久蘇の古墳時代遺跡からは、木槌・杵・巻取具などの農産物加工用の木器が出土していて、両遺跡間に木器の性格が異なっている点が注目される。

しかし、住居跡群の構成は複雑であり、個々の住居の規模や遺跡内の住居数などを明らかにすることは困難であった。県内の低湿地弥生遺跡としては、昭和20年代に大和町久留間の弥生後期遺跡の調査が実施されたのみであって、この点からもこの土生・久蘇の両遺跡の学術的価値は高く評価されるものであり、全国的に見てもこの種の遺跡としては最重要遺跡の一つに挙げられるものである。この集落遺跡に接続して展開していると推定される水田跡についての調査は、今後の課題であるが、久蘇遺跡からは洗場と推定される溝とその上に渡されていたと考えられる棚の木枕等も発見されていて注目される。また、久蘇遺跡出土の土師器は、本県における土師器としては最古の形式に属するものであって、佐賀市成章中学校庭出土以外には、まだその類例を見ないもので、本県の土師器編年上価値の高いものである。

わが国に農耕文化が定着してから2千数百年、その農耕文化の始源と初期農耕集落の謎を秘めているのが、この土生・久蘇遺跡であるといふべきであろう。

5. 展示品の概要

- ①石器類——石斧・石庖丁・石簇・凹石その他
- ②土器類——壺・甕・鉢・器台その他の弥生式土器および土師器
- ③土製品——土弾・紡錘車・カマド脚その他
- ④木製品——平鉢・二叉鉢・三叉鉢・容器・火キリ具・杵・巻取具・槌・石斧の着柄・織機その他
- ⑤建築材——柱根・礎板その他
- ⑥食料植物——炭化米・木の実・瓜
- ⑦参考品——弥生時代および古墳時代前期の県内出土資料
- ⑧パネル——遺跡・発掘状況・重要遺構・遺物出土状況等の写真、解説

この展示は、県社会教育課の協力をえて実施するものであり、原始農耕文化の理解を出土遺物によって深めていただけばかりでなく、国土開発に伴なって破壊に瀕する遺跡の保護とその調査等についての課題をも提起するものである。

なお、この展示期間中に、この遺跡と遺物の図録集を刊行する予定であるのでご期待ください。なお、8月5日（土）13時30分からは、本館中展示室において、土生・久蘇遺跡とその出土遺物についての研究講座を開くことになっているので、多数のご参観をお願いします。

（学芸課）

九博協講演会

九州における仏教美術（要旨）

九州大学文学部助教授 平田寛氏

今日は、ここ一年ばかりの間、私が考えてきた仏教美術研究の志向、つまりどういう風な構えで今後研究していくかというようなことについて若干お話ししたいと存じます。

九州の仏教美術の總觀が可能になったのは、1969年に福岡県文化会館が企画した「九州仏教美術展」からであったと思われます。翌年には、それと関連して仏教芸術76号に「九州の仏教美術特集号」が編集されています。九州における仏教美術が総合的に考えられる足がかりができたと言えます。

しかし、この展観と特集号は、たしかに、立派な研究の成果をしめていたにもかかわらず、なおこれでも九州の仏教美術が成立したとは言えないように思います。戦前に編さんされた「觀世音寺大鑑」或はまた「觀世音寺史」や「富貴寺壁画」が、すべて各個研究であったように、この展観や特集号も、今猶各個研究の段階にあると私には思えます。

そういう研究の段階を前提にして考えるわけですが、私は九州に赴任して以来、若干研究者として困惑している状態にあります。様式史観では九州の仏教美術の特質は規定できぬと考えさせられるからです。と申すのは、奈良で研究している時は、いわば出来あがつた日本仏教美術史観みたいものが私なりにあって、仏教美術にはある歴史的な順序を追った展開があり、それを自分は何とか理解しているという感じを持っていたように思います。富貴寺或は九州各县下の仏画などを見ても、それは日本仏教美術のどこに位置さすべきかという私の尺度が、はっきりしていたわけです。富貴寺や昨年重要文化財に指定された佐賀県鏡神社の高麗時代の楊柳觀音図とか、それらはおのれに美術の本流に特殊なものとして付け加え、或は補足すればよかったです。新しい仏教絵画史料を見た場合も、研究者として私の仏教美術の史観に、大きな矛盾あるいは理論的困惑は余り感じることはありませんでした。

例えば觀世音寺の丈六の不空絹索觀音像の場合を考えてみると、その像は13世紀初め貞応元年（1222）に作られたものですが、仏教美術史の上では、13世紀の20年代という年は、いわゆる慶派が写実的な彫刻を京都や奈良を中心にして作り出していた時代です。ところが不空絹索觀音像は、恐らく制作年代がはっきりしていなければ、多くの研究者がその古風なスタイルから藤原の仏像ではないかと考える様式の作品です。

ごく普通の言い方をすれば、これは九州における彫刻様式の発展の後進性を示すという評価の仕方ができます。けれどもこのように、日本美術史の見地から様式の後進性をみて、九州の仏教美術を或る特殊なものとして見る見方だけをしていては、九州の仏教美術の本質そのものを見損なうことになるように、私には考えられるわけです。美術の研究は比較ではありませんし、美術作品の特質は、それを産んだ社会基盤のなかでしか把握できない面があるからです。

どうすればいいのか？ まず根本的に美術とそれを研究する学問の歴史的基盤をよく確めることにあると考えます。いわゆる美術の流れが美術史の問題として学問的な形を備えてきたのは、近代においてからですが、その近代とは、芸術の本質は芸術家個人が表現するものという藝術觀が根底にある時代です。しかし、中世以前、つまり仏教美術が成立する時代においては、いわば近代の藝術家ではなくて、共同制作をおこなう工房の職人が制作の当事者で、しかも職人にはそれを雇う寺院があり、寺院にはお金を出してくれる願主または旦那というものがあり、場合には零細な結縁者があり、色々な社会層或は文化層が非常に複雑な形で組み合って、一つの有機体として動き合っているわけで、近代的な一個人の一藝術作品という藝術意識では御しきれない面をふくんでいます。私はそのような中世以前の仏教美術が作られる基盤が、複雑な有機体、総合体であるという前提に立った上で、その藝術の独自性というものを見ていくという形で考えを進めるべきだと思います。近代の美術史観では、美術作品の独自性は、おもに様式の変化という観点のみから、本筋と特徴という形で理解するわけですが、仏教美術における独自性は、全ての歴史的存在がそうであるように、色々の要素が絡み合った面で、その独自性が考えられねばならぬと思います。様式史観から脱却しなければならない面があります。

では、その独自性を考える、つまり中世以前の文化的複合体というものを考えるには具体的にはどうすればよいか。私は二つの問題があると考えています。

一つは、仏教美術を見る場合、我々はそれを作った側の条件においてのみ考え易いが、実はそのものが7～800年の昔から今日に伝わっていることが可能なのは、それを持ち続けてきた人間の意識がある。つまり作品を作るということとは別に、作品を生きながらえさせた人々の条件というものを考えてみなければならないという点です。そうして初めて、美術作品は私たちの研究そのものと生活そのものとにかくわりあってきます。

もう一つは、全く伝承不明で、色々の歴史的な繋りが今日から考えやすから不明な場合の、対象の選択の問題です。これはやはり様式の問題から考えざるを（6頁につづきます）

昭和47年度 九州博物館協議会総会



新緑香る5月はがくれの地で、九州博物館協議会総会が開催された。総会に先立ち10日15時から佐賀市有明荘で理事会が開催され、総会提出議題等について熱心に協議が行なわれた。

翌5月11日9時から29館より42名の会員が参加して総会が開催された。

まず柳会長（宮崎県総合博物館長）より今回は九博協結成以来最大の出席者があり、また、15日に沖縄が本土に復帰するが、協会では、それにさきがけて、琉球政府立博物館の参加をえたことは実に喜ばしいことである。九博協加盟の館園等種類はちがっているが、その中に共通の問題点があり、今後各館、園が協力して九博協の発展のため邁進したいとの力強い意見がのべられた。その後、琉球政府立博物館学芸員、宮城篤正氏の紹介、大園佐賀県教育長の挨拶につづき、日程説明、議事にはいった。

議題および協議事項

1. 昭和46年度会務報告
2. 昭和46年度歳入、歳出の決算について
3. 役員の改選について
4. 昭和47年度歳入、歳出予算（案）について
5. 各館からの提出議題について
6. 昭和48年度九州博物館協議会の開催地の決定について
7. その他

以上について活発な意見交換がなされ、今まで理事は5名であるが、沖縄の加入により、会則の一部を変更し、理事を1名増して6名とすることになった。新役員

- 会長 柳 宏吉（宮崎県総合博物館長）
副会長 坂上隆志（鹿児島市立鴨池動物園事務長）
〃 古賀秀男（佐賀県立博物館長）
理 事 爪生二成（福岡県文化会館館長）
〃 松尾哲男（長崎県立美術博物館長）

理 事 上村健一（熊本市立熊本博物館長）
〃 梶原虎太（日田市立博物館長）
〃 三ツ石和友（鹿児島市立美術館次長）
〃 外間正幸（沖縄県立博物館長）
監 事 宇都久範（鹿児島県立博物館主任）
〃 井上正彦（太宰府天満宮宝物殿学芸員）
の各氏が選出された。

また昨年に引き続き職員の研修会を11月下旬宮崎で開催することにし、新しい事業として「九州博物館めぐり」の発行が決定された。

なお次回（昭和48年度）の総会は鹿児島県で開催することが決定された。

つづいて13時より、会場を佐賀県立博物館にうつし九州大学助教授、平田寛氏の「九州における仏教美術」についての講演、当館副館長、木下之治氏の「佐賀県の紹介」について、大隈記念館の見学後懇親会が開催され、博物館の諸問題について活発な意見交換が行なわれた。

5月12日は、現地研修が行われ、陶器の町、有田の有田陶磁美術館、今右衛門窯元、柿右衛門窯元を見学のあと、日本三大稲荷の一つである鹿島市祐徳神社に参拝。祐徳博物館での研修を終り、なごやかなうちに有意義な総会の日程を終了した。

現地研修に際しては、有田陶磁美術館・今右衛門窯・柿右衛門窯・祐徳稲荷神社等から非常なご便宜をいただき、参加者一同深い感銘を受け、感謝申しあげる次第である。

（5頁からのつづき）

えないでしょう。

私は、鎌倉時代や室町時代における中国或は朝鮮といった国々との交渉において成立する美術様式、それを考えてみる必要があるよう思います。九州では、何故にそうした大陸の様式は定着しなかったのかという問題があるわけです。逆に或る独自な様式が定着する場合として私は、国東地方の文化、例えば富貴寺の美術を色々な角度から考えてみるとよいと思います。九州で独自な様式が定着しているからです。

このように、仏教美術の成立する基盤、つまり文化的な複合体であるという前提に立ってその独自性を考えていくという作業の中で、はじめて九州における仏教美術の特質は明らかになり、やがてはその全体の独自性といったものが、大きな形で明確になるのではないかと思います。そうした時に、仏教美術の研究をおおして、形骸的な知識の問題としてではなく、今日の九州における我々の文化活動の意義が確認されると思います。それがいまからの我々の課題だと思います。

（文責 博物館）

県内博物館案内 その2

祐徳博物館



○所在地 佐賀県鹿島市古枝1686 祐徳稻荷神社境内
TEL鹿島局2-2151

○交通の便 長崎本線肥前鹿島駅より祐徳バス「祐徳神社前」下車、徒歩5分

○休館日 毎週月曜日 ただし1月1日～15日まで
無休

○入館料 大人50円・高生30円・小中生20円

○館長 星野英夫 主事 植松第三郎

○設置の事由と目的

日本三大稻荷のひとつ、祐徳稻荷神社に参拝する全国からの数多くの人々に対し、神社の宝物を中心に郷土の考古・歴史・美術・工芸・民俗等の資料を公開・展示し、学校教育ならびに社会教育の向上と地方文化の発展に貢献する目的をもって神社の社会事業の一環として設置された。

○設立の経過と特色

昭和30年2月祐徳神社宝物殿にあった鹿島鍋島家伝来の数々の遺品、特に祐徳稻荷神社を創始された鹿島第三代藩主鍋島直朝の夫人である花山院万子の方（祐徳院殿）の遺品を主に、県内出土の考古資料を公開・展示し、昭和30年4月1日博物館法による登録博物館として発足した。昭和46年4月從来の木造建物を耐火防盗の鉄筋平屋建に全面改築し、人文科学系博物館として九州においても特異な存在となった。特に祐徳院殿の遺品や鹿島歷代藩主の甲冑等は、この博物館資料に異彩を放つものであり、考古資料の豊富さとその内容は佐賀県立博物館の考古資料とともに圧巻であろう。

組織は館長1名、主事1名、女子職員2名で運営され、場合によっては祐徳神社よりの応援もなされている。とくに星野英夫館長は刀剣や郷土史の研究者として著名で、県立博物館協議会委員長、佐賀県文化財専門委員、前佐賀県刀劍審査委員等の経歴が示すように、文化事業には極めて深い見識があり、この完備された博物館の施設と内容も、実に氏の文化事業に対する並々ならぬ情熱のあらわれであるといふべきであろう。

○施設

緑の木々に映える丹塗の社殿と川を距てた神社の外苑に立つ白壁の清楚な平屋建の鉄筋コンクリートの博物館である。

敷地面積 5639.25m² 建坪 620m² 事務棟 144m²

・大展示室 350m² 特別展示室 9m² 第一考古室 41

.2m² 第二考古室 29.7m² 収蔵庫 11.4m² 準備室

11.4m² その他 23m²

○主要展示品

(1号室)

●古伊万里・鍋島などの陶磁器、古伊万里人形

●鹿島鍋島家伝来の漆絵類

(2号室)



●県重文指定の伝行光の太刀、葵紋ちらし黄金作りの太刀、初代・三代・三代・五代・八代等の肥前刀、山城国信国作・志津三郎兼氏作、その他の刀剣。

●佐賀藩祖鍋島直茂着用の甲冑、鹿島第一代藩主鍋島忠茂以下鹿島歴代藩主が着用した甲冑

●祐徳院殿御着用の衣類や御使用の用具類、祐徳院殿の御生涯図

●鹿島錦、鍋島直樹書、高木背水画、柳生流兵法秘傳書、その他

(3号室)

●戊辰戦争の錦御旗

●藤津・鹿島地区出土の経塚出土品、出土の青磁・青白磁、弥生遺跡出土の流雲文歌帯鏡・素環頭太刀・細形銅劍・広鉋銅鉢・貝釦、その他

(4号室——考古資料)

●先土器時代の尖頭器

●縄文時代の土器片・石鍬・石斧・石匙

●弥生時代の腰棺・壺棺・壺・独钻石・石鍬・石斧・石庖丁

●古墳時代の葬身具・土師器・須恵器・鉄製の武器武具・鉄製農工具・紡錘車・円筒埴輪・人物埴輪

●歴史時代の古瓦・蔵骨器、

●朝鮮の壇・古陶器・石劍

(屋外)

祐徳稻荷神社への道標各種

(学芸員 森醜一朗)

博物館日誌

- 4月28日 県内博物館施設協議会
 5月10日 第12回九州博物館協議会総会（有明莊・当館）
 5月18日 第40回独立美術協会展開場（2号・3号・

- 大展示室で5月28日まで）
 5月21日 昭和47年度第1回博物館教室
 5月28日 昭和47年度第2回博物館教室
 5月31日 九州沖縄各県教育委員長来館
 鍋島直泰氏外4名来館
 6月4日 野鳥展開場（大展示室で6月25日まで）
 6月11日 夕刊フクニチ歴史の旅会員52名来館

行事お知らせ

事業名	月日	曜	時間	内 容
常 設 展	9・30 まで		9.00～ 16.30	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古、歴史、美術工芸の資料を系統的に展示して本県の歴史と文化の特質の理解に資する。
野 鳥 展	6・4 ▼ 6・25	日 ▼ 日	9.00～ 16.30	県内の主な野鳥の標本を展示、解説し、あわせて野鳥保護思想の普及に資する。
有明海・玄海 漁 捷 具 展	7・4 ▼ 7・25	火 ▼ 火	9.00～ 16.30	有明海の干潟模型や魚介類を捕獲する漁捷具、玄海における捕鯨用具や各種魚介標本を展示する。
第6回 研究講座	7・15	土	13.30 から	有明海沿岸における漁捷習俗 講師 当館副館長 木下之治氏
土生、久蘇 遺跡資料展	8・4 ▼ 8・25	金 ▼ 金	9.00～ 16.30	静岡県登呂遺跡に匹敵するといわれている三日月町土生遺跡（弥生中期）および小城町久蘇遺跡（古墳前期を中心）からの出土品（石器、木器、土器、木の実、米等）を多数公開展示し、当時の農耕生活文化の理解に資する。
第7回 研究講座	8・5	土	13.30 から	土生遺跡の考古学上における価値 講師 当館 木下副館長、木下、森 各学芸員
山口亮一 遺 作 展	9・3 ▼ 9・15	日 ▼ 金	9.00～ 16.30	本県美術協会育ての親として、また、本県美術教育の発展のために生涯をささげられた故山口亮一画伯の業績をしのび、本県美術の向上に資するためその回顧展を催す。
理 科 作 品 展	9・23 ▼ 10・4	土 ▼ 水	9.00～ 16.30	県下小・中・高校児童・生徒のすぐれた理科作品を展示し、児童・生徒の科学に関する創意的的研究的才能の育成と向上をはかるとともに、広く一般の観覧に供し、科学教育に対する理解を深める。

◎博物館教室案内（8号よりつづき）

当館では、博物館資料を中心とした博物館教室を下記により中・高校生を対象に考古、歴史についての教室を開催します。（参加者は、すでに申込んでいる者に限る）

記

1、期日

7月 2日、9日、16日、23日、30日の各日曜日
 8月 6日、13日、20日の各日曜日

2、時間

13時から15時まで

博物館報 第9号

発行年月日	昭和47年7月1日
編集	吉賀秀男
発行	佐賀市城内一丁目15-23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社